

「あくあ、面倒くさい」

夏が過ぎ秋の涼しさがのんびりと進行してきたある日の朝、博麗神社の巫女、博麗霊夢の第一声はそれだった。

なぜそんなことを言ったのかを説明するのは、経緯よりも、神社の裏庭の様子を伝えたほうが早いだろう。至る所に散らかっている瓶、瓶、瓶。そして、それらには例外なく酒が入っていた。昨夜までは。

要するに、裏庭は今宴会の後という悲惨な状況にあるのだ。

霊夢はこれから一人でこれを掃除しなければならぬ。そう考えるだけで霊夢の気は重くなっていった。

「まったく、自分の飲んだものくらい片付けていけばいいのに」

誰に言うでもない文句を口にしなが、裏庭に降りようとする。

しかし、昨日の夜は宴会のため、床に就くのが遅かったにもかかわらず、今朝は普段通りに起きてしまったために、霊夢の目は完全には覚めていなかった。

それが原因になり、段差を踏み外し体勢を崩したことに気付くのが遅れてしまった。もしも目が覚めていれば、受身を取ることが出来たかもしれない。だが、このときは駄目だった。

勢いをつけた霊夢の体は、そのまま地面に激突した。

正午というにはまだ少し早い頃、普通の魔法使い・霧雨魔理沙は博麗神社の境内に降り立った。

神社の方に歩いていくと、縁側に座っている霊夢を見かけたので、あいさつしようと声を掛ける。のだが、「よっ、掃除は終わったのか……っつて、どうしたんだ？」

思わず尋ねてしまうほどに霊夢の様子がおかしかったのである。顔をしかめて左肩の辺りを右手で押さえていた。

「ん、魔理沙？ どうかしたの？」

「いやいや、それはこっちの台詞だぜ。何かあったのか？」

「ああ、ちよつとね。朝寝ぼけてて裏庭に落ちちゃったのよ。おかげで痛いうえに、ほら」

霊夢は左腕を上げる動作をしたが、ほとんど上がることは無かった。

「こんなだから片付けるの本当に苦労したわ。まったく、ついてないわね」

「ほう、そりゃ災難だったな。——それにしても」
魔理沙は、もう一度霊夢の様子を見て尋ねる。

「本当に大丈夫か？ 相当辛そうに見えるが」

「あら、優しいのね。今日は」

「私はいつだって優しいぜ」と、冗談は抜きにして、永遠亭のあの薬師にでも診てもらった方が良いんじゃないか？」

「そうねえ……」

霊夢は考えるように目を閉じる。そして、しばらくしてから、

「分かったわ。それじゃ、少し出掛けてくるわね」

「そうか、んじや私は勝手に茶でも飲んでるぜ」

「好きになさい」

そう言つて立ち上がると、霊夢の体は宙に浮き、そのまま飛び立っていった。

「あら、こんな形で貴女に会うのは初めてかしら？」

霊夢が永遠亭の診察室に着くなり、永琳はそう言つて出迎えた。

「私だって人間なんだから診察にだって来るわよ。それより、何とかならないのここ？ 来るのがかなり面倒なんだけど」

「どうやら迷いの竹林の中にあることを言っているらしい。だいぶ迷つたのか、霊夢の機嫌は悪かった。」

「辿り着けたのだから良いじゃない」

「また来るときも迷うなんて面倒だわ。地図ぐらい作らなさい」

「たぶんそれもあてにならないでしょうけど、検討しておくわ。それで、今日はどうしたの？」

尋ねられた霊夢は魔理沙のときと同様に、左腕を上げる動作をしようとする。

「縁側から裏庭に落ちちゃったときにぶつけたんだけど、どうにも動かないのよ」

「なるほど。ちよつと診せて」

「鎖骨骨折ね」

永琳はそう診断した。

「骨折？ 何、冗談とかじゃなく？」

疑り深い顔で霊夢が尋ねるが、永琳の顔にそんな様子は窺えない。

「生憎とね。当分の間、固定して動かさないほうが良いわ」

「え、それつつまり、右腕だけで過ごさせてこと？ どれぐらい？」

「まあ、だいたい一ヶ月でしょうね」

「え、嫌よそんなの。何とかならないの？」